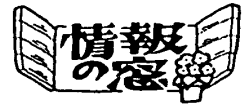


インド OR 学会に参加して



大山 達雄 (政策研究大学院大学)

インド OR 学会 (ORSI) の会長である Prof. S. P. Mukherjee (University of Calcutta) に招待され、2001年12月27日から29日にかけてインドのカルカッタで開催されたインド OR 学会に参加することにした。インドは行ったことがなかったので、見てみるのもおもしろいかな、という程度の軽い気持ちで引き受けてはみたものの、いざ、あわただしい年末に1週間も海外出張が入るとなると、12月の1ヶ月がさらに短くなったのを身にしみて感じることになり、招待を受けたことを悔やむことしきりだった。とにかくクリスマスの12月25日に出発し、カルカッタ到着は当日夜9時半頃になったが、迎えの自動車で Guest House に向かう道路における車の混雑とスピードとによる交通状況のすさまじさ、そして運転手の積極的というか、攻撃的というか、プロの運転技術に驚嘆、圧倒されることになった。

インド OR 学会は年1回、全国を12の区域に分けて、順番に開催しているとのことで、今回はカルカッタ大学 (University of Calcutta) の Prof. S. P. Mukherjee の所属する統計学部 (Department of Statistics) が中心となって、カルカッタにある Indian Institute of Chemical Engineers (Jadavpur University に所属する組織が独立しているようなもので、インドではよくある形態のようである) のキャンパスで開催された。今回は、University of Maryland Eastern Shore との協同開催ということで国際学会 (International Conference on Operations Research and National Development と銘打っていた) と称していたわけであるが、実際の外国からの参加者は、Prof. D. K. Sharma (University of Maryland Eastern Shore) と私、そしてオランダ1名、イラン2名の計5名であった。

研究発表会の発表件数は約90件、参加者は約100名程度で、3日間ということであるから、ORSIの現、前会長などの数人の主要メンバーの講演、招待者講演等を入れてもスケジュールはそれほどきついものではなかった。発表のキャンセルがあったり、発表の移動



インド OR 学会役員と共に
(中央に Prof. Mukherjee と筆者)

が知らない間に行われてみたり、全員に食事が提供されるため、食事時間が制約されるというだけで発表の時間延長もかなりおおらかなものであった。ORSIの現会長 Prof. S. P. Mukherjee の講演で印象に残ったのは、ORにおいては、“If we can define, we can measure. If we can measure, we can analyse. If we can analyse, we can control.”、われわれは今後、ORの一つの重要な発展分野として OR application for national development を考えるべきであろう、ということであった。また前会長 Prof. M. K. Banerjee (Secretary, Department of Science and Technology, Government of West Bengal) の講演で印象に残ったのは、ORは“Philosophy?”あるいは“Mathematical tool?”ということであった。われわれが常に頭の片隅においておくべき言葉かもしれない。セッションの内容は、Data Envelopment Analysis, ORの応用(2つ)、エキスパートシステム, Information Technology(2つ)、ファジィシステムとITとGA, 最適化(2つ)、Health Care Management, 離散最適化(2つ)、在庫(2つ)、環境管理, Financial Management, Maintenance & Management, 数理計画, 多目的計画, 待ち行列理論などで、それぞれが数件の研究発表からなるものであった。

カルカッタはインドの東側に位置して人口が多く、貧しい都市といった程度の予備知識のみで出かけたが、実際に行ってみて、ここは17世紀以来の英国支配下の首都であったということ、現在はデリーが政治的中心都市、ボンベイが産業上の中心都市であるのに対して、カルカッタは知性、文化の中心であること、した

がって世界的にも著名な詩人、思想家、映画監督などを数多く輩出していることを知った。さらにまた、インド出身のノーベル賞受賞者は、タゴール (1913年, Rabindranath Tagore, アジア初の文学賞), C. V. ラーマン (1930年, Chandrasekhara V. Raman, アジア初の物理学賞), マザー・テレサ (1979年, Mother Theresa, インド初の平和賞), セン (1998年, Amartya Sen, アジア初の経済学賞) の4人であるが、彼らすべてがカルカッタ出身あるいはここで業績を残したということをカルカッタのインド人は誇りにしていることなども知った。

カルカッタの中心部にカルカッタ大学のキャンパスがあり、その周辺にもいくつかの大学が集まっている地区がある。その一帯の道路沿いのすべてが本屋であって、間口1, 2間の小さな書店(?)が一般娯楽図書や雑誌から、専門書に至るまで古本、新刊書すべてを所狭しと積み上げている光景が通り全体、そしてその地域一帯すべてを占めているのには驚き、インド人の本好きというか、教育熱心というか、向学心というか、そんなものに圧倒された。帰国直前の朝、新聞を読んでいたら、次のような記事を見つけた。インドでベストセラーを出そうと思ったら、フィクションを書くような時間を無駄にすることはするべきではない、むしろおもしろい (“juicy”) 教科書、たとえば “Modern English”, “Guided English”, “Active English”, “Better English”, といったインド人の英語熱に訴える魅力的な教科書を書くべきである、そしてまたそのような本が隠れたベストセラーであるということである。インド人は平均3つくらいの言語、たとえばヒンズー語、ベンガル語、サンスクリット語、そして英語などを話すという。これも教育熱心、読書好き、勉強好きのインド人にしてはじめて可能なことなのかもしれないと納得した。

学会の最終日最後のセッションで、Valedictory Speechということで、インドOR学会主要メンバー4名とともに、学会開催に当たってのお互いの労をねぎらい、感謝の言葉を述べあった。実行委員長である Prof. A. N. Basu (Vice Chancellor, Jadavpur University) からは、学会参加者そして実行委員全員への感謝の言葉が述べられ、ORSIの発展のために、応

用研究、そして数学教育の推進が必要であることが強調された。また私は、Prof. Mukherjeeをはじめ、多くのORSI主要メンバーと知り合い、友人となり得たこと、そしてまた3日間という短期のカルカッタ滞在にもかかわらず、インドについて知り、思い、考えることができたことを心から感謝すること、私自身の人生の中でも非常に貴重な経験をさせてもらったことを申し上げた。また、本会議中にインドの友人から “Tell us your impression about ORSI. Honestly! Honestly!” といわれ、インドのOR学会に初めて出席した印象として、日本OR学会の研究発表会と比べて、インドでは発表時間が必ずしも厳密に行われていないのに対して、日本ではtime keeperがいて、発表の時間厳守を実現していること、そしてインドのOR学会では発表のキャンセルがかなり多いこと、を私の印象として述べたら、皆納得して笑っていた。そして最後に、私自身の帰国後の仕事として、以下の2つのことを約束する旨、述べた。

1. インドのOR学会研究発表会の様子をわが国の友人達に伝えること。
2. 2003年にNew Delhiで開催されるAPORS 2003にわが国から少なくとも50名が参加するべく、APORS 2003の実行委員長であるProf. M. C. Puriに頼まれたので、その実現のために努めること。

ほぼ1週間弱という短いカルカッタ滞在ではあったが、街並みの人の波の大きさとダイナミックな動き、そして町中を走る古い車体の満員の市営バスにぶら下がって乗っているインド人のエネルギーとたくましさ、インド人の働き、学ぶ意欲と向上心を実感するには十分であった。情報技術、インターネットの発展、普及とともに世界がますます小さく狭くなりつつある現在、われわれにとって最も必要なことは、諸外国と同様の立場で同様のことを考え、それぞれの目標の実現に努力している友人、仲間と積極的に交流、情報交換をはかりつつ、自らのレベル、ポテンシャルの向上を目指すことであろう。日本とインドのみに限らず、今後ともいろいろな国々のOR学会員との積極的な交流を図ることが必要であろう。しかもそのようなことが可能、容易な現在なのだから。